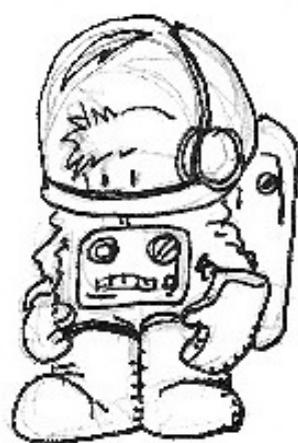


さよなら地球



加賀ヒロツグ
clark0226

火星調査団は二つのグループで構成された。

一つは、技術的にも精神的にも指導者的・教育者的役割を果たすことを期待され、火星に骨を埋める覚悟を決めた年配の科学者たち。もう一つは実際の調査を担い、将来的な増派や帰還の可能性もほのめかされた若い宇宙飛行士たち。

着陸は成功。火星コロニーの建設も順調に進行し、想定内のトラブルは幾つかあったものの調査はほぼ計画通りに進められた。

21XX年。人類の悲願であった地球連邦が創設され、人類人口は100億+1に達する。100億とは地球に住む人類の数。「+1」は老衰や事故、病気で減少した火星調査団最後の一人の数だ。

地球連邦創設と100億人突破を祝い、地球人類が祝賀ムードに包まれる中、火星から連絡が届く。調査は順調に進行中。だが、幾つかのトラブルで食糧と医薬品が不足している。至急、追加のロケットで補給物資を送って欲しいと。

火星まで省エネ軌道を用いない急行ロケットを飛ばす費用は数十億ドル。だがその予算があれば、赤道付近に住む人々数百万人の食糧問題を解決できる。

創設されたばかりの地球連邦は決して裕福ではなく、解決すべき問題は山積している。それに、旱魃や寒波といった自浄作用で地球人口が抑制された結果、火星移住計画は不要とされて久しかった。

必要な調査もほぼ終了している。現在、火星の男に与えられている仕事は彼に生きがいを与える為の名目的なものに過ぎないし、必要なら無人口ボットに代替させることも可能だった。

果たして地球人類は火星の男を見捨てるのか。旧国家群の代表達は全会一致で判断を下した。

「了解。通信終了」

男は通信機の電源を落とし、軽くため息を付く。だが落胆は無い。予想出来たことだ。

そうして、彼は椅子を180度回転させると、背後にいた「彼ら」に向かって肩をすくめて見せた。口の端に浮かんだ笑みは彼の精一杯の皮肉の表現だ。

「聴いてただろう？これが地球が俺に押し付けた仕打ちさ。未練は無いよ。君達の好きにしてもらって構わない」

Why Not

朝起きて、少年は自分の両腕が真っ白な翼に変わっているのを目の当たりにする。

しばしの混乱。

やがて気付く。

ということは昨晚、夜空の星に頼んだ願い事が叶ったのだ。

飛び立とうとした彼の目の前に、頑丈そうな分厚い鉄格子が表れる。

これは牢獄か？いや、鳥カゴだ！

その時、視界の隅に美味しそうな匂いの鳥餌の山がうつり込む。

空腹を感じた少年は、飽きるまで小さな粒状の鳥餌をついばむ。

今度は喉の渇きをおぼえる。

水飲み用のパイプの飲み口はすぐに見つかった。

やがて満足いくまで水を飲み終えた時、彼の頭から檻の外の事は消えている。

探し回らなきゃいけない食糧がこんなに蓄えられているのなら、

どうして焦って飛び立つ必要があるというのだろうか？

バーミスラクスの船 第百七夜

帆柱がきしむ。

守り神であるはずの舳先の女神像は、いつの間にか波にさらわれていなくなっている。

風が、トップマストの横帆から順にビリビリと切り裂いていく。

一本のロープが切れ、メインセイルが旗の様にバタバタと激しくはためいた拍子に船体が大きく傾く。

もう限界だ。

全ての帆を切り離して、この嵐をやり過ぎさなくては。

だが、僕以外の船員は船底から水をかき出す作業にかかりっきりで、甲板には誰もいない。

その時、船倉の戸がハネ上がって狂気に取りつかれた船長が姿を現した。

肩には船底から運び出した大きなオーク樽を担いでいる。

それはこの長旅で残った、最後の食糧を詰めた防水樽のはずだ。

僕が止めるのも聞かず、船長はそれを海に投げ捨てると、血走った眼で振り返った。

荒々しい強風さえも突き抜ける、雷の様な怒声で奴が叫ぶ。

「まだ足りないぞ、クラーク！ライの船より速く行くには、全ての積み荷は捨てねばならぬ！」

船長の言う「積み荷」とは何の事かを悟った僕は、帆を繋ぐロープを切り離すために用意していた手斧を手にとって構える。

船長は手ぶらだが、鯨に喰われて鉤爪に作り変えたその左手は、既に何人もの荒くれ者の血を吸ってきたと船員同士の間でもっばらの噂だった。

勝負は一瞬でかたが付くはずだ。

甲板は何度も波に洗われて滑りやすくなっている。

そして、船長の右足と左の義足の間を通り、僕の足元まで伸びている、さっき切れたばかりの一本のロープ。

それに奴が気付いているかどうか僕が僕の運命を握っている…

Bookends

ある散歩道を歩いていると、二人の男がベンチの両端に、まるでブックエンドのように腰かけている所に通りかかった。片方は白くやつれたコートを身にまとった老人、片方は黒いスーツに身を固めた紳士然とした男だ。

二人は、僕が「見える」ことに気付くと、真ん中の空いたスペースに座るように僕を促した。それは軽いジェスチャーだけだったが、不思議と促されるままにそこに座ってしまう。

だが広いベンチとはいえ、見知らぬ男二人に挟まれて座るのは何とも居心地が悪い。そこで僕は間の抜けた、けれどもありきたりな質問をした。まずは白い老人の方を向いて。

「調子はどうです？」

老人は被りを振った。

「さっぱりさ。今じゃ誰も私を本気で敬ってはいくれない。その振りをしたり、してるつもりになっちゃいるがね」

「家族に愛されていないと思ってるんですか？」

僕は老人が哀れになってそう尋ねた。

「愛だと？確かに今の人間の方が、この私に愛だのなんだのと訴えてくるがね。だが、それは重要な問題じゃない」そこで老人は鼻で笑った。

「重要なのは『畏れ』だ。かつての人間は畏れるが故に、心から私を敬っていたのだ。お前もそうだろう？」

そして老人は、黒い紳士の方に問いかけの眼差しを送った。

「確かに、私を畏れる人間も今じゃほとんどいない」

黒い紳士も首を横に振り、残念ぶった顔をしてみせた。

だがそれは、すぐに残酷な笑みに変わった。

「だが、そのお陰で…」

彼はそこで間を置き、再び同じ言葉から話を続けた。

「だがそのお陰で、私の方は随分と仕事がやりやすくなったがね」

僕はなんとなく、二人が何者なのか分かったような気がした。

でもその瞬間、ベンチが急速に現実感を失う。

さて、そこで目が覚めた。

23時間56分4秒

誰にも話したことは無いのだけど、僕の右側頭部には一箇所、感覚の無い部分がある。
日常生活には何も支障は無い、いってみれば触覚の盲点のようなもの。

今日、その場所に小さな生傷が出来ているのを見つけた。

目が見えない人は血の匂いで自分の外傷を見つける事があるそうだけど、僕の場合は鏡で確かめるより他に発見する方法は無い。

気づかぬうちに虫に刺されたのか、寝てる間にどこか固い場所にぶつけたものか。

指で押すと血が滲み出すけど痛みは感じない。

自分の体の一部なのに、そうでないかのようなこの感覚は嫌いじゃない。

そもそも体の一部とは、どこからどこまでを指すのだろうか。

爪や髪の毛は切っても痛くないけど体の一部だ。

皮脂や粘液の類も、身体と物理的に連結されている訳じゃなくとも、欠かすことの出来ない体の一部といえる。
その意味では入れ歯やコンタクトレンズも同様だ。

メガネは顔の一部だし、帽子や服や靴もその一部といえる。

比喩的にいえば、車や自転車は足の延長といえるし、住居や家族といった集団も自分自身の延長にある。

それから地面に仰向けになって空を見上げる時、太陽は沈むのではなくただ視界から過ぎ去っていただけだ。
回転する僕の視界を通り過ぎて、ただ背後に回りこむ。

僕は一周23時間56分4秒かけて、ゆっくりと回転する。

楽園

テラリウムの中で戯れる二匹の生き物を見ながら、彼は悩んでいた。

方舟のサブプロジェクトの一つである「生体による種の保存」という任務は、これまでのところ成功していると言って良い。

対宇宙線ガラスで囲まれた温室内は完璧な温度と湿度が保たれているし、それぞれの動植物は必要最小限の生息数を維持している。万が一いずれかの生物が死亡しても、クローン胚を使った単位増殖を繰り返せば、その数を変えずに半永久的にこの生態系を維持していくことが可能だ。

だがしかし、それだけで彼に託された「生態系を維持したまま種を保存する」という任務を果たしたことになるのかという疑問が彼の悩みだった。なぜならば、この二匹は彼を生み出した種族の末裔であり、かつて母性である地球を支配した知的種族であったのだから。

地球上における生態系を再現し保存するのが目的だとしたら、この生き物たちに彼らが有していた知識や技術を与えることも任務の一つなのではないか？

だが同時に、それは生態系標本を維持管理するという彼の任務そのものを失敗させかねない危険もはらんでいた。その知識とは、かの種族に繁栄と破滅をもたらした「文明」という名の情報だったからだ。

長い冷凍の眠りについた主人達は、彼の質問に答えることは出来ない。

やがて彼は一つの決断を下した。

ならば、この生き物たち自身に判断を下してもらえば良いのだ。この生き物たちもまた、彼が保護すべき多くの生命体の一つであると同時に、彼がその命令に従うべく定められた動物種の一員なのだから。

かつて、地球上で栽培された果実を象る刻印の彫られた、手の平大の一枚の金属板。それは、彼のような人工知性が生み出される以前に用いられていた演算装置。旧世界の文化や技術を保存し、ウイルスによる汚染を逃れた唯一の情報端末だ。

彼は音声通話装置を使って、二匹のうち的一方に語りかけた。

「その果実を食べたならお前の眼は開け、善と悪を知るものとなるだろう」

イブと名付けられた一匹の猿は、渡された端末の匂いを嗅ぐと、詰まらなそうにそれを、ジャングルの茂みの奥へと投げ捨てた。

バーミスラクスの船 第十二夜

「船なんてどこにもないじゃないですか」

僕がそう言うと、船長はその鷹のような眼で水平線を見つめたまま答えた。

「待て。もうすぐ日が沈む」

やがて、完全に夕日が沈みきって、あたりがタールの様に真っ黒な暗闇に満たされると、船長は合図のカンテラを大きく三回振った。

すると突然目の前に、大きな四段横帆を備えた快速帆船が現れたのだ。

「もし、おまえの探すものがこの海のどこかにあるというのなら、この船で辿り着けない場所はない」

最後のロケットが行ってしまってから、もうどのくらい経ったのだろう。

始まりは唐突だった。

国家間の緊張は無かったわけじゃないけど、かといってその時に始まったというわけでもない。

温暖化と海面上昇に伴う、深刻な食糧不足と領土紛争。宣戦布告も犯行声明もないまま、一つの都市が核攻撃によって消滅し、それに呼応するように続けざまに二つの大都市と一つの小国が消滅した。

発端となった着火点が破壊されたことで事件の真相は謎に包まれたまま、人々の間に残されたのはいつ自分たちが攻撃されるのかという疑心暗鬼だ。そうして、地球人は災厄の地となったこの星を見捨てる決断を下し、遙か銀河の星々に新天地を求める大移民計画が始まったのだ。

各国のロケットが続々と旅立つ間も海面は着実に上昇し、僕の住んでいた高台も半年もしたら沈んでしまうだろうとニュースの海面予報は警告していた。それでも隣人の忠告に耳を貸さず、ここに残ってしまった理由は今でも分からない。

はたして半年後、一人の残った僕の家のある丘の周りにも、その下の町にも、見渡す限りの地平線のどこにも海はやってこなかった。代わりにあたりを覆っていたのは、白い雪と暗い影だった。

ロケットの冬だ。

皮肉なものだ。何万基ものロケットの噴射煙によって太陽光線は遮られ、地球は瞬く間に氷河期に突入したのだ。

始めの数日間は苦難の日々だった。分厚い防寒着と、重い食糧を背負っての徒歩での移動。寒さと暗闇。だが、二つ目に辿り着いた町の廃屋で、雪上でも走れる四輪駆動車を見つけてからは状況は好転した。電力の切れたガススタンドから、手動のポンプで燃料を汲み上げる手並みも今ではお手の物。そうして各地に点在する、まだ雪に埋もれきっていないゴーストタウンを線で繋ぐように旅を続け、僕はここに辿り着いたのだ。

太陽の光の降り注ぐ地。予想通りだった。南北の貿易風が衝突する赤道収束帯に、この場所はある。かつて常夏の楽園と呼ばれたこの土地も、今では過ごしやすい温帯湿潤気候だった。

しかし、季節はやがてうつろう。夏の終わりだ。

地球は絶え間ない自浄作用を発揮してロケットの煙を吸収し続け、晴れ間は高緯度地域へと拡大。海が再び上昇し始めたのだ。

住まいとして選んだ、かつて富裕層の別荘だったであろう屋敷が立つこの丘のふもとに海がやってきたのは、ここに辿り着いて二か月後の事だった。

三か月後、海は、隣り合った丘やその上の街並みを繋ぐ稜線上の道路まで達し、丘は完全に孤立した一つの島となった。

そして、その一週間後の朝、海が屋敷から一つ下の段地の街並みまで達したおかげでバルコニーからの眺めは絶景になった。赤茶けた瓦屋根を白波が洗い、教会の鐘楼をトビウオの飛跡がかすめる。

さらにその一週間後、海は屋敷の二階の床まで達し、僕はバルコニーから梯子をかけて屋根の上まで登らなくてはならなくなった。

夕暮れ時、屋根の縁に腰掛け、美しい景色を眺めてため息を漏らす。静かな海。その水面に墓標や十字架の様に林立するのは、沈んでしまった家々の煙突やアンテナだ。ざらざらと夕焼けに燃える海の向こうに連なる島々は、かつての山脈の頂きたちだろう。

海よ

輝く入り江に沿って踊る海

銀色の輝き

雨の下で海は、そのきらめきをうつろわせる

シャルル・トレネのそんな歌の一節を思い出しながら、僕は晚餐の準備を始めた。

藤製の安楽椅子をロープで持ち上げ、プールサイドのビーチチェアよろしく屋根の天辺を跨がせて据え付ける。傍らには小さなサイドテーブルを、同じように冠瓦を挟むようにして固定した。

その卓上には、今日の為に残しておいたとっておきのワイン。それにチーズや缶詰、塩漬け肉といったちょっとしたツマミも用意してある。ことここに至ってちょっとしたバカンスの様相を呈しているのは何とも妙な気分だ。念のための錠剤も用意はしたけれど、極上の赤ワインで一心地着くとそれはもう要無しに思われた。

背もたれのクッションに深々と頭をうずめ、点々と瞬き始めた星々を見つめながら僕は思う。母なる海に抱かれる時を。生物学的な母と海とは似ても似つかない代物だけれど、それでもこうしていると何かの共通点があるように感じてくる。漢字の「海」に「母」という字が含まれ、フランス語の「Mer(海)」と「Mere(母)」が同じ発音なのは、ただの偶然じゃないのかもしれない。一瞬、ロケットで旅立った人々のことも頭をよぎったけど、すぐにそれは頭の片隅から追いやられた。満天の星空。寄せては返すさざ波。

海は歌う。優しい子守唄を。

帰郷

帰還船の展望デッキ。

眠りから覚めた彼は、凝り固まった体をほぐすように大きく伸びをして肩を回すと、一回り年上のひ孫の隣に腰掛けた。と、ごく静かなチャイムの音と共に船内の照明が弱いオレンジ色の明かりに切り替わり、眼前の星空が、まるで一斉に明るさを増したかのように揺らめいて舷窓に浮かび上がった。

「知ってるかい？地球じゃ夜になっても明かりが夜間照明に切り替わったりしないんだぜ」

「本当に？地球人は夜に眠らないのかい？」

「まさか。照度調整は必要ないのさ。地球じゃ太陽が沈むんだ」

「沈む？」

「ああ、それでこそ凍ってた甲斐があるってもんさ。帰るまでに教えることが沢山ありそうだ」

そう言うと彼は背もたれから体を起こし、足元の――帰還船の進行方向の――舷窓を見つめた。

彼が目覚める半年ほど前から船は減速期に入っており、それ以来、その窓から見えるのは青白く輝くロケットの逆噴射炎だけだった。

だが、その青白い炎を眺めていると、彼には不思議とその先にある小さな光が感じ取れるような気がしてくるのだった。

まだ数光年先にある、真っ黒な虚空に浮かんだ青く小さな儂い輝きが。

政府は環境問題に画期的な解決策を打ち出す。それは人間活動の総ツイート化。擬似感覚技術を駆使し、人々は外出せずともTL上で出会い、働き、遊び、恋をする。やがて全人類は電算機内に格納され、自分達がTLの中にいる事も忘れてしまう。そしてあなたはそっとその電源を落とす。

#twnovel

TWNOVEL 2

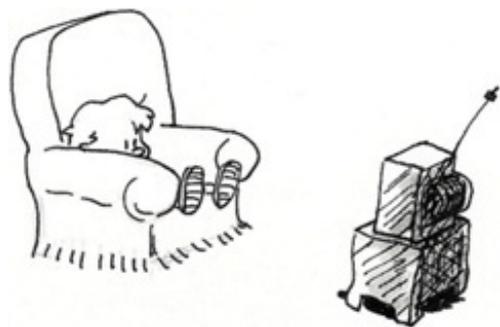
「待機なう」毎朝一回、それは世界に向けて発信される。国連が抑止効果を高める為、全ての核をBOT化する事を決めたのだ。「カウントダウンなう」誤認識か、何気ない誰かの呟きに世界じゅうの迎撃システムが反応する「発射なう！」「発射なう」発射な「発」「」

『さよなら人類』 #twnovel

TWNOVEL 3

「臨時ニュースの途中ですが、ここで緊急速報のお時間です。と、その予定でしたが非常警報が入りましたので、この後の報道特別番組は予定を変更し、えー、まずはCMのお時間です」

『今日のニュース』



TWNOVEL 4

長いトンネルを抜けて家路に向かう。途中、酸素の濃度が変わるので、体が馴染むまで注意して進まなければならない。「サルヴス・シス」帰り道、誰かに呼ばれた気がして振り返ったが、そこには誰もいなかった。風は西から吹いていた。『来訪者』 #twnovel

TWNOVEL 5

#twnovel 「このツイートを見つけた者は世界の半分を手にするだろう」そう呟いて彼はタイムラインを去った。誰にもフォローされず、誰もフォローしていないアカウント一つを残して。

『はじまりの物語』より

TWNOVEL 6

ただわけもなく遠くまで行きたくなって、こんなところまで来てしまった。帰りの燃料を使い果たしてしまったから、僕はこの場所から君にメッセージを送る。君は待っていてくれるだろうか？冷凍睡眠による慣性飛行で20年。僕が帰星するその日まで。

夢を実現できる機械を発明した。といっても将来の夢ではなく、寝ている間に見た夢を、現実世界にも作り出せる装置だ。夢で食べ損ねたご馳走を食べたり、不思議な世界を旅したり。けれども段々、夢と現実の境界が分からなくなってきた、やっぱり夢は夢のままがいいと思ったところでその夢から覚めた。

啓蟄

早起きの新聞配達が小気味良いカブの唸りを響かせ、鳩たちが夜の葬送曲を歌う。

ようやく春めいてきたとはいえ、朝はまだまだ寒い。

冬眠から覚めたのもつかの間、手招きする夢に引き寄せられながら僕は思考する。

人間、先のことを考えて生きなくてとは云われるけれど、あまり先のことを考え過ぎると、あるのは深い闇だけだ。

そんな時は、過去のことを考えたほうが希望を見出せる。

記憶を辿り、体を丸めて、胎盤の暖かさを思い出す。

それは個体進化的な過程での先祖帰り。

儀式的な死と再生。

そうして布団を頭まで引き上げ、世界に抵抗を試みる。

つまりは、いつもより惰眠をむさぼり、胎児に戻って自分をリセットするってわけ。

さて、生まれ変わって見たものの、何も変わった気がしない。

外は眩しいけれど、まだまだ寒いよ。

そういえばあの日もこんな感じだったな。

月曜日の朝午前7時

月曜の朝、冷蔵庫の扉を開けると、そこに別世界が広がっていた。四角い枠の向こうに広がる広大なシダ植物の森。その向こうには黒煙を上げる活火山。翼竜の翼が唐突に扉すれすれをかすめたその時、冷凍庫ドアにマグネットで貼られた「節電」というメモと、その横のタイマー兼用デジタル時計の時刻が目に入る。

僕はドアポケットの下段から牛乳パックを、もう一方の手でブラキオサウルスの首からジャムとバターの瓶を取り出すと、体を半回転させてドアを閉め、急いで朝食の準備に取りかかった。

バーミスラクスの船 第百夜

「命乞いか、クラーク？」

嫌らしい顔でにやけながら、船長は肩に乗せたエイハブ船長を撫でる。

悪趣味な船長が、先代の船長の名前を拝借して名付けた猿だ。

奴はかぎ爪で猿の頭を耳元に引き寄せると、なにやら内緒話でもしている様を演じてからうそぶいた。

「俺はかまわないが、エイハブ船長はそうは思っていないよだぜ？」

船長が手を離すと猿はその肩から帆柱に跳び移り、一目散にその天辺まで逃げ去っていった。

その時、僕は思った。

船長のいくつもある噂の一つが本当だとしたら、ひょっとするとあの猿は本物の「エイハブ」なのかもしれない。

贈り物

「今年も良い子に仕方が足りなかったみたいだね。さあ、第三希望のゲームソフトだ」

「また駄目なのかい？」

「物事には釣り合ってもものがあるからね。君みたいに望みが高くっちゃあ、そりゃ他の子より頑張りが必要になるってもんさ」

「じゃあ一体、いつになったら第一希望のプレゼントがもらえるっていうのさ？」

するとサンタは古びた帳面をめくり、乾いた指で探し当てた彼の名前をなぞりながら答えた。

「そうさな。大丈夫、まだ君のクリスマスは46回残ってるよ」

冴えたやり方

「君は傘を持って来たかい？」

そう尋ねると、友人エスはいつものように得意げな顔で微笑んだ。

「いや僕も傘は持ち歩かない主義でね。でもそれより、ずっと便利な方法があるよ」

そう言って彼は携帯電話の様なものを取り出すと、いくつかのボタンを押してから再びポケットにしまい込んだ。

そしてまた、何食わぬ顔でぼんやりと立ち続ける。

何も起こらず、何もやってこない。

「まあ、少々時間がかかるのが難点だけどね。でもほら、あと少しだ」

こちらの考えを察したように彼が言う。

数分後、雨は次第に小雨に変わり、やがて完全に降り止んだ。

エスは言った。

「そろそろ良いみたいだね。じゃあ帰ろうか」

ランプから現れた悪魔が煙をくゆらせながら、つまらなそうに宣言する。

「叶えてやる願い事は三つだ」

「では、私を世界一賢い人間にしてもらいたい」

「承知した」

何も起こらない。

だが、外へ出てみると、町は大混乱だった。

家畜は野に放たれ、放置された子供たちは泣き叫ぶ。

そして言葉を忘れ、猿のように食物を奪い合う大人たち。

二つ目の願いは、世界を元に戻すことに費やされた。

三つの願い 3

「三つ目だ」

男は一枚の革袋を取り出す。

「ならば世界中の富を、この革袋の中に詰めてくれ」

「承知した」

手の中でもぞりと何かが動く感触。

そこには、さっきとは少しばかり様子が変わった革袋が握られていた。

中身がびったりと張り付いて開くことのかなわない、裏表が逆になった革袋が。

Busstop

「次で降ります」

古代遺跡で発見された緑色のボタン。つい押ししてしまったのは、抑えきれぬ好奇心か、長い発掘作業による疲れのせいかな。

ピンポンというチャイムと共にボタンが点灯。直後、地球規模の大地震と巨大嵐が発生した。やがて、惑星はゆっくりと自転を停止し、地殻が分断される。

またここに、新しい月が誕生した。

バーミスラクス船 第八十六夜

すると船は、物凄い速さで走り出した。

帆柱は弓の様にたわみ、それでも折れる事はなく、波頭はまるで固い流氷にぶつかった時のように竜骨を叩いたが、それでも船は壊れなかった。

船は何度か波頭を飛び越えて大きく跳ねたかと思うと、今度はまるで海の上を浮かんでいるかのように、スムーズにまっすぐと走り出した。

余りのスピードに、積乱雲さえも長く尾を引いた白糸の様に見え、太陽さえも明けの明星の様に小さくなる。

僕は急に息苦しさを感じ、隣にいる船長にわけを尋ねると、彼は平然と答えた。

「船の前方が真空に近くなり、代わりに高圧の空気が後ろから船を押しやっているのだ。だから、余り甲板に頭を出さない方が良く、外は空気が薄くなってるからな」

僕がさらなる疑問の目を向けると、船長は説明を続けた。

「他の船員は皆、眠らせてある。こんな時に起きていても、体力を消耗するだけだからな。だが、お前には役目があるから起こしておいたのだ」

船はますます速度を上げる。

不用意に近づいた海鳥が「風」に巻き込まれ、白い矢のようになって、あっという間に遠ざかっていくのが見えた。とその時、船長は唐突に天井扉を跳ね上げて甲板に躍り出ると、眼帯を外し、その片方の目で、船の針路をにらんだ。（でも僕にはただ果てしなく続く、何もない水平線が広がっている様にしか見えなかったが）

船長は叫んだ。

一瞬片方の、ルビー色の眼がこちらを向いて僕はぎょっとする。

「見つけたぞ！ライの船だ！！さあ、下へ行って他の連中を起こしてこい！」

ドライブ

「これは何のボタン？」

助手席と運転席の間の、エアコンやオーディオの操作ボタンが並んだダッシュボードのパネルを指さして少年が尋ねる。

父親は前を見て運転を続けたまま、真面目な顔で答える。

「それはSOSボタンさ。皆に迷惑を掛けるから、必要のない時は押しちゃ駄目だよ」

「ならこれは？」

「それは脱出ボタンだ。屋根が開いて座席ごと飛んで行ってしまうから、絶対に押ししてはいけないよ」

「ならこれは？」

「それは自爆装置のスイッチさ。5秒後に爆発するから絶対に押しちゃ駄目だ」

「お父さん、自爆装置のスイッチなんていつ押すんだい？」

すると父は、さも分かり切った事だという顔をして答えた。

「決まってるだろう？脱出ボタンを押す直前に押すのさ」

遠くで赤ん坊の泣き声がする。

弁の傷んだ蛇口から、数秒おきに水滴が滴り落ちる。

季節外れの蚊が、弱々しく空を横切る。

少年は窓ガラスに息を吹きかけ、星の無い夜空に星の絵を描く。

The Hundred Year Starship

イギリスのDailymail誌によると、NASAは"The Hundred Year Starship"という名称で、宇宙飛行士を二度と地球に帰還させることのない火星調査計画を進行中なのだそう。

宇宙ロケットは地球の引力圏を脱出する際に燃料としてその質量の大半を失うわけで、火星から帰還する際の燃料も必要となればその質量は莫大なものになる。

単純に車や飛行機のように燃料を倍にすれば往復できるというわけには行かない訳で、片道切符で調査団を送るのは合理的な判断と呼べるのかもしれない。

ロシアは既に将来の火星調査計画を見据えた人体実験を開始したので、それに対抗して担ぎ上げた様にも思えるけど、果たしてこんな計画に参加する宇宙飛行士はいるのだろうか？

(モスクワでは現在、四人の男性が宇宙船を模した完全密閉空間内で520日間の集団生活実験を継続中)



ロシアとの違いで興味深いのは、NASAがこの計画を単なる調査計画ではなく、火星殖民計画と呼んでいることだ。

アメリカという国も始めは不退転の覚悟で海を渡った殖民団が作り上げたわけだし、そう考えると火星への片道旅行も違った意味合いを持つのかもしれない。

ついに宇宙まで拡がる帝国主義。

「宇宙、それは最後のフロンティア！」

まさにスタートレックのキャッチコピーを地で行く世界だ。

でも、あんまり宇宙飛行士たちをアメリカ開拓の英雄に準えてPRするのは考えものだとも思う。なぜって彼らは、最終的には本国に反乱を起こして独立を果たしたのだから。

cf. **The Hundred Year Starship: The Nasa mission that will take astronauts to Mars and leave them there forever**

ともあれ、この計画で平穏な火星の暮らしが脅かされるのかと思うと憂鬱な気分になる。まったく煩わしい話だ。

お読み頂きありがとうございます。

パブー初投稿です。

今までブログやツイッターに投稿した散文をまとめ、少しばかり加筆しました。

加筆修正しつつ次作も作ろうかと思しますので、

コメント・ご感想・ご意見・ご質問・苦情・お叱り・叱咤・励まし等々、

お気軽にお寄せいただければ幸いです。

加賀ヒロツグ



さよなら地球

著者：加賀ヒロツグ aka clark0226

ウェブサイト <http://www.geocities.jp/barmithruxe/music/index.html>

ウェブログ <http://geocities.yahoo.co.jp/gl/barmithruxe>

Twitter <https://twitter.com/#!/clark0226>

